地蜘蛛考

長尾勇

はしがき
一 命名と変化
A 巣に関する例
a 在り場所に関する例
b 形に関する例
B 姿態に関する例
C 特有の習性に関する例
D 童詞による例
E 民間信仰による例
F 他の動物から類推した例
G 命令の原因が不明の例
二 命名と分布

はしがき

「地蜘蛛とは一体どんな虫なのだろう」と思われる方は、戸外に出て御自分の家の土台や、立木の根もとをのぞかれるとよい。きっとそこに、泥にまみれた細長い袋が、二本三本と、土の中へもぐっているのを見つけることが出来るであろう。それが地蜘蛛の巣である。北隆館発行の「日本動物図鑑」（九五九頁第一八五〇図）には、この蜘蛛について、大要次のように記してある。

節足動物　蛛形類　真正蛛蜘目　地蛛科　ぢぐも　Atypus Kacschi, Doenitz

全長一六粍ニ達ス。とたてぐもノ如クニ前方ニ突出セル上顎ヲ加算スルトキハ二〇粍ヲ超ユベシ。（中略）本州、四国、九州ニ汎布シ、垣根、樹基ニ長キ袋ヲ作リテ居ル。戸蓋無ク、上端ハ閉ヂタリ。七―八月成熟シ、八―九月産卵ス。

このように、どこででも見られる極くありふれた蜘蛛なのであるが、普通には何と呼ばれているだろうか。試みにこれを数種の辞典の「見出し語」に求めてみることにする。辞典によっては、異名として別にいくつかの見出しを設けている例もあるが、ここではそれらを第二次的な見出し語と考えて採り上げないことにする。同時に、これと比較する意味で、「蝸牛」および「目高」についても同様の調査を試みた。いうまでもなく、前者は柳田国男氏が方言周圏論の素材とされたもの。後者は辛川十歩氏が日本各地から約四千の俚語を採集されたもの。ともに俚語量の多いことである。調査の結果は次の通りである。

辞典＼語彙	地蛛蜘	蝸牛	目高
大百科辞典（平凡社）	アナグモ	カタツムリ	メダカ
国民百科辞典（富山房）	じぐも	かたつむり	めだか
大辞典（平凡社）	ジグモ	カタツムリ	メダカ
大言海	つちぐも	かたつぶり	めだか
大日本国語辞典	あなぐも	かたつぶり	めだか
辞苑	じぐも	かたつぶり	めだか
広辞林	つちぐも	かたつぶり	めだか
明解国語辞典	つちぐも	かたつむり	めだか
辞海	じぐも	かたつむり	めだか

この表から感じられることは、蝸牛、目高では、夫々語形的に略々統一されているのに比し、地蜘蛛では、ジグモ、ツチグモ、アナグモの三語が鼎立の形勢にあるということである。しかも現状は、「カタツムリ」や、「メダカ」の語は、小学唱歌にもうたわれ、文芸作品や日常会話にも屢々使われるため、略々標準語的地位を占めているのに比し、地蜘蛛においてはそのような影響も殆どなく、各地で各様の俚語が、思い思いに生長していると考えられる。このように俚語量が多く、しかも決定的な共通語のみられないものにおいて、言語地理学的考察を進めることも亦意義があるのではなかろうか。

調査法としては、東京近郊を一部、臨地調査したほかは、すべて通信調査を行った。但し私の場合、通信調査といっても、主として大学の通信教育部の学生に依頼したため、従来の、この種調査にみられた欠点は幾分か補われたものと考えている。その利点を列挙してみると、

1　夏期の面接教授により、毎年直接話しあえる。

2　言語学、国語学の講座により、学力を、ある程度そろえることが出来る。

3　通信教育部の学生には地方の現職教員（主として小学校）が多い。

4　回収率がよく、六〇～七〇に達する。（「日本方言学」中の柴田氏の説によると通信調査の回収率は平均三〇％とある。）

なお、欠点としては、調査地点を制限されるということ。つまり学生の居住地や、任地のほかは調査出来ないということがある。

また、地蜘蛛と生態が似ているため、とかく間違えやすい蟻地獄についても同様の調査を並行しておこない、つとめて両者の混同が起きないように注意した。

一　命名と変化

現在までに日本各地から採集しえたこの蜘蛛の俚語は約七五〇語である。私はこれを命名の動機により七項目に分けてみた。以下各項目について命名の形式、変化の過程等を述べてゆくことにする。

A　巣に関する例

地蜘蛛で先ず目につくものは巣である。巣に関した命名は最も広く、かつ多く行われている。今これを整理して、更に巣の在り場所に関する例と、巣の形に関する例とに分けてみた。

a　在り場所に関する例

(1)ジグモ（全国的）極く自然で素直な命名である。九州では蜘蛛をコブと呼ぶことが普通のため、ジコブ（長野県西筑摩）の例がある、ジロオグモ（神奈川県横浜市）は「地の蜘蛛」＋「次郎蜘蛛」と考えられる。

(2)ツチグモ（全国的）この話も素直な命名であり、九州では、ツチンコブ（熊本県菊池郡）の例もある。土地によっては「土」は「泥」であることもあり、ドログモ（関東西部、岡山県福井県）スドログモ（栃木県那須郡）の例がある。ツツグモ（青森県三戸郡）は初めから「筒蜘蛛」という意味で使われたとも考えられるが、「土蜘蛛」の東北音と考える方が適切であるかもしれない。

(3)ジノシタグモ（石川県河北郡）は、更に巣の位置をはっきりさせた類でチカグモ（茨城県猿島郡）チチュウグモ（埼玉県南埼玉郡）の例もある。

(4)ジモグリ（南関東一帯）は巣というよりも、蜘蛛の位置を言っているものの様であり、同じ系統の話に、ツチモグリグモ（群馬県碓氷郡）モグリグモ（東京都南多摩郡）、ジゴモリ（高知県幡多郡）等がある。

(5)カベグモ（山口県大島郡）は更にその位置を具体的にあらわした話である。同類に、ノキグモ（群馬県碓氷郡）、イエグモ（東京都北多摩郡）、ドゾオグモ（広島県呉市）がある。たしかに土蔵の土台などにはこの蜘蛛の巣がたくさんひっついている。

(6)ネグモ（山梨県南都留郡）は木の根もとのこの蜘蛛の巣に着目したもので、カキネグモ（東京都「福井県出身」）キンコツ（鹿児島県姶良郡）等も同じと考えられる。

(7)エゴグモ（岡山県勝田郡）の「エゴ」は窪とか岩穴という意味の語と考えられるが、最近ではエーゴグモ（岡山県苫田郡）のように「英語蜘蛛」と類推した例もある。

b　形に関する例

(1)アナグモ（全国的）も命名が素直なため、広く用いられており、また、古くからも用いられていた証拠に「日葡辞書補遺」に載せられている。アナグモも、やはり九州にゆくと、アナコブ（熊本県鹿児島県）である。アナッコ（東京都南多摩郡）タテアナグモ（新潟県三島郡）アナタテグモ（栃木県伊達郡）タテグモ（神奈川県足柄上郡）あたりは分りやすいが、アンガラ（熊本県玉名郡）は、アナガマ「甘藷などを貯蔵するため縁の下や崖などに掘った穴」（全国方言辞典）の転とみるのは無理だろうか。カマタチグモ（岡山県苫田郡）のカマも、「穴」とか、「淵」とかいう意味であればこの部類に入ると思う。

(2)ツルベグモ（宮城県黒川郡）(3)ハシラグモ（栃木県那須郡）(4)トックリグモ（山口県玖珂郡）は、いずれも縦に細長い巣の形を形容したものと思われる。ボチ（埼玉県大里郡）も「徳利」の俚語であり、地方によっては「たて穴」という意味の語である。

(5)ツットッコムシ（埼玉県南埼玉郡）の「ツットッコ」は「苞」であり、スボムシ（愛媛県東宇和郡）の「スボ」が「苞」の俚語であるのと全く同型である。

(6)ヘタグモ（和歌山県伊都郡）は、この地方の人々が、地蜘蛛を指して「ヘタをつくっている」「ヘタの中にいる」などということから考えあわせて、その巣の形を「果実のへた」になぞらえたものと思われる。

(7)フクログモ（全国的）もアナグモと同様、広く用いられ、九州では、フクロコブ（熊本県鹿児島県）東北では、フグロコ（青森県北津軽郡）と呼んだりしている。フクロオグモ（千葉県東金市）は、引音によるものであり、「梟」（フクロオ）との関連はないらしい。（註）クログモ（兵庫県、岡山県、茨城県、栃木県）は、フクログモの語頭の「フ」が落ちたものらしく、「黒蜘蛛」と考え

るには、発音上にも、意味上にも無理があるようである。柳田氏は「黒子（ホクロ）」の俚語フスベの語頭のフ音が落ちて、スベになった例を述べておられる。（註二）

(8)ジイブク（茨城県結城郡）は「地袋」と考える。

(9)ダンブクロ（千葉県君津郡）は、「筒ッポだんぶくろ」とよんでいた明治初年の兵隊服が思われるように、「ダブダブのももひき」や「ズボンを連想しての命名である。一部の部落では、キツネノダンブクロ（千葉県君津郡）とよんでいる例もあるが、動植物の名に「キツネ」や「カラス」の名をかぶせることは、子供の好んでやる処らしい。（註三）

(10)ツズレムシ（石川県江沼郡）の、ツズレは、「ぼろ」という意にとれば、実物に大変しっくりした表現といえる。

(11)カンピョオ（関東南西部）は、袋の状態を「乾瓢」に例えていることは明らかで、土地の人々は「勘平」→「乾瓢」という語源解釈によって、この語が生まれてきたことを殆ど知っていない。くわしくはCで述べることにする。カンピョオ（東京都立川市）は、この語から更に類推した形と考えられる。

（註一）昭和二十九年十月十日国語学会研究発表会の際、東金市御出身の永野賢氏より、同地方にフクロオグモをはじめ引音の多いということの御教示をいただいた。

（註二）同氏著「方言覚書」《鍋墨と黛と入墨》七六頁

（註三）柳田国男氏著「国語史新語篇」八〇頁参照

B　姿態に関する例

前にも述べたような袋状の巣を掘り上げてみると、大抵その中には一匹の小さな蜘蛛がはいっている。それは他の蜘蛛と違って割に毒々しさのない、つやつやした肌をもっている。このような姿を、子供達は、まことに適切に描写している。

(1)チャイログモ（埼玉県所沢市）は体の色をあらわしている。

(2)アメグモ（大分県滋賀県）のアメは「飴」であって、やはり、色とかつやを表現したものと思われる。

(3)アブラグモ（和歌山県西牟婁郡）も、つやを表現したものと考える。

(4)ハダカグモ（鳥取県東伯郡）は、この蜘蛛が右で述べたように、体の表面につやがあり、他の蜘蛛にくらべて、裸という感じが強い点に着目した命名と思われる。

(5)ダンゴグモ（岡山県勝田郡）(6)ダルマグモ（兵庫県飾西郡）は、ともに、丸々とした、この蜘蛛の姿をとらえたものと考える。

(7)クモノコドモ（茨城県猿島郡）という観察は、多くの昆虫がその幼時を地下で過す習性から推して、地蜘蛛を、将来は樹上にあみを張るべき蜘蛛の幼虫なりとみたをのであろう。

(8)コンペエトオ（東京都南多摩郡）掘り上げた袋の中から転がり出る時の、ちぢこまった蜘蛛の姿は、子供にとって金平糖にみえたのであろう。但しこれは次のCで述べるカンペエから類推された形である。インコロタンコロ（栃木県那須郡）も、同じ類の命名と考えられるが、これには音興味も加わっている。

(9)コモリグモ（岡山県苫田郡）は「土にこもる」とも「子守りをする」とも解釈出来る。「子守り」とは、九月から十月頃、この蜘蛛の巣をほっていると、袋の中から親蜘蛛といっしょに数十匹の小蜘蛛が出てくることがあるが、このことに対して名づけたのではないかと考える。大言海にも〔つちぐも〕の項に「くもの子を散らす

が如し」とは、この蜘蛛のことであると記されている。また、実際に袋の中に白っぽい小蜘蛛がいっぱいつまっているさまは、マタキグモ（滋賀県坂田郡）の「飯」とも見えたのであろう。

C　特有の習性に関する例

この蜘蛛が子供たちに特に親しまれる理由として、次のようなことがある。この蜘蛛をつかまえて頭をつついていると、蜘蛛は自分の爪で自分の腹を傷つけてしまう。同時に中から白い体液がとび出してくる。蜘蛛にとっては至極迷惑な話であるが、いたずらざかりの子供たちには、まことに興味深い遊びなのである。

(1)ハラキリグモ（九州を除く略々全国的）　今述べたような性質を武士の切腹とみることは、日本人では、むしろ当然な観察である。同じ意味で、ハラカキグモ（山梨県北都留郡）シリキリグモ（群馬県利根郡）セップクグモ（千葉県群馬県東京都三多摩地方）ジサツグモ（栃木県那須郡）等の例がある。

(2)サムライグモ（東日本一帯）　切腹をする人、即ち武士（サムライ）であり、ブシ（埼玉県大里郡）は「武士（ブシ）」、ブッシャン（埼玉県大里郡）は「武士さん（ブシ）」と夫々漢語を当てたもの。武士の中でも代表的なゲンジグモ（群馬県吾妻郡）あるいはトノサマグモ（三重県鈴鹿郡）切腹をした殿様として、アカオノトノサン（三重県河芸郡）等、連想の糸は次から次へとたぐられてゆく。また、代官のいた土地では、ダイカングモ（東京都南多摩郡）といった例もある。

(3)カンペエ（関東南部長野県）　しかし何といっても腹切りの名優は忠臣蔵六段目の早野勘平である。この類の命名は意外に広く行われており、その形もまちまちで、ハンガングモ（大分県下毛郡）アラカミカンペエ（東京都八王子市）オカルカンペエ（神奈川県相模原町）から、ハラキリオカル（東京都西多摩郡）と、終に腹切りをした勘平の方は忘れられてしまう例すらある。蜘蛛の気持になったか、ハラキリカンベン（埼玉県所沢市）と語源解釈した例もある。カンペエと、フクログモとから、カンブクロ（千葉県君津郡）という「紙袋」を思わせる造語もなされている。さきに、Aのb頃の最後に述べたカンピョオは、実は、このカンペエからの子供らしい語源解釈であったのである。あるいはその間に、いわゆる「関東ベー」に関する誤った回帰が加味されたかもしれない。

(4)サブロオ（東京都八王子市）　このサブロオの話も、「武士（サムライ）」→「侍ふ（サムラフ）」→「三郎（サブロオ）」の順を経たものとまでは考えられなくても、少くともこれら語形の類似が、その間の類推を容易にしたものと考えることはできるであろう。これから「ギンザブロオ」（東京都西多摩郡）ジンザブロオ（東京都西多摩郡）ジュウザブロオ（東京都青梅市）デンザブロオ（東京都西多摩郡）カンザブロオ（東京都西多摩郡）の如く、数多くの呼びやすい三郎が生まれている。だいたい、三郎という語は口調上、造語力が強いらしく、童歌などで、一郎でも、二郎でもよさそうな処にまで三郎がつかわれている。（註二）

(5)サムガリグモ（埼玉県熊谷市）　この蜘蛛の土の中にもぐっている姿が「武士（サムライ）」→「寒（サム）がり」と語源解釈させたのであろう。

(6)チチグモ（栃木県埼玉県群馬県）　ツチグモの訛音とも思われたが、土地の人々は、腹を切った時に出る白い液を「乳」とみたてているのである。

(7)エサグモ（東京都三鷹市）　このように散々いじめた挙句、子供たちは小鳥の餌にしてしまう。特に「めじろ」などはこれを好んで食べるという。

（註一）「鳥かあ〳〵勘三郎、雀ちゆう〳〵忠三郎」伊藤信吉氏著「土の唄と民話」一三五頁

D　童詞による例

子供の遊びは無心である。相手がいても、いなくても、相手が人形であっても、時には虫であっても、あたかも友達に呼びかける如くおしゃべりしているのをよく見うける。

この蜘蛛の場合、子供達が呼びかける機会は二つある。一つはCで述べた腹を切らせる場合であり、一つは、蜘蛛の袋を土の中から掘り出す場合である。前の例としては「武士々々腹切れ」「勘平々々腹切ってみせろ」「赤穂の殿さん腹切って死んでも、四十七士が仇をうつ」といった童詞が多く、大抵その最初の句に地蜘蛛の俚語が用いられている。

それに対して、掘り出す場合の童詞は、形もまちまちで、それから出来る俚語には、変ったものが多い。

(1)エンバホロホロ(三重県飯南郡)「エンバホロホロ下が焼けとるん上あがれ」エンバは、「くもの巣」の俚語である。つまり「、くもの巣を掘ろう掘ろう」といっていた詞の、はじめの一句七音がこの蜘蛛の俚語になった例である。これが、アンマホロホロ(三重県飯南郡)と変ると、すぐに、アンマサン(三重県飯南郡)の話が生まれる。

(2)ズウズッポ(千葉県市原郡)は「ズウズッポ〳〵船に乗ってこー」という童詞によるもので、袋が切れずにずーっと抜けて出ろという願いがこもっている。スッポンヌケグモ(京都府熊野郡)も同じ願いであり、これがスッポン(京都府熊野郡)となってしまうと、あるいは、子供たちの中には、あの亀に似た「すっぽん」を思い浮かべている者もあるかもしれない。ヌケヌケ(鳥取県東伯郡)も、「抜け抜け」と解する。

(3)アンデエデエ(鹿児島県姶良郡)「アンデエデエ早よ出れ出れ、後からこにせがうっかけてくっど」「アンデエデエ」は、「穴出え出え」である。オデンデン(群馬県碓氷郡)デンデングモ(福井県坂井郡)デンデンムシ(福井県坂井郡)デンデンコブ(宮崎県都城市)と考えられる。この辺の経過は「蝸牛」(註一)尚、地蜘蛛をしめすデンデンムシの成立と全く同様である。「蝸牛考」にデンデンムシの名を与えている福井県坂井郡では、「蝸牛考」によると、蝸牛にマイマイツブリ、オッシャビョウビョウの語をあてているようである。しかし調査の時期に著しいずれがあるので、くわしい点は再調査しなければ分らない。

(4)タツタツノボレ(熊本県玉名郡)「竜々のぼれ、竜々のぼれ」とくりかえし呼んで、竜が天に舞い昇る如く上ってこいというのであろう。

(5)ジンジク(福井県坂井郡)「ジンジク〳〵縁の下焼けるぞ」ジンジクとは「静かに」という意で、「静かに〳〵」と一心にこの蜘蛛の袋をほっている子供達の姿が目に浮かんでくる。しかし、そのように静かに掘ってもこの袋はきれてしまうことがある。ツクシグモ(栃木県河内郡)はそのきれやすさを「つくし」にたとえたのであろう。

(6)テンジョオグモ(山梨県南巨摩郡)「蜘蛛々々テンジョオグモ、天井に上って腹切れ」童詞の途中の話が独立して対象物の名となった例で、この種の俚話は、母胎となった童詞を見ないでは、語源的な理解は殆ど不可能である。

(7)オチャノミムシ(神奈川県横浜市)「蜘蛛々々あがれ、上にあがってお茶飲め」お茶飲みにこいという誘い方は関東各地で行われている。チャアガレ(神奈川県横浜市)オチャグモ(栃木県那須郡)等の例もある。

(8)アカイクルマ(千葉県君津郡)「ダンブリ〳〵遊びにこい赤い車でこい」ダンブリはAのb項の(9)ダンブクロの変形で、赤い車で呼びよせるあたり、まことに子供らしい思いつきである。村によって

は「ダンブリ〳〵東京の車にのってこい」という所もあり、今にトオキョオノクルマという俚語が生まれるかもしれない。

(9)シタノカチカチ(茨城県猿島郡)「シタノカチカチ下が火事だから上さあがれ」動物を火事だと驚かすことは地蜘蛛に限ったことではなく、からす、とかげ、蝸牛、蟻地獄などに各種の例がみられる。(註二)オメンカチカチ(茨城県結城郡)は「お前ん火事々々(カチカチ)」でありカチカチグモ(茨城県猿島郡)の例もある。うさぎとたぬきの「カチカチ山」は、実は「火事火事山」ではなかろうかという推測に、有力な傍証となるであろう。また、シタノカニ(茨城県猿島郡)は「下の火事」→「下の蟹」と、より具体的に解釈したものらしく、更にカニグモ(茨城県猿島郡)となった例もある。

(10)ミズクミグモ(埼玉県北企郡)「蜘蛛(クモ)々々天上が火事だから水もってあがれ」火事だから水を汲んでこいという次の段階に入る。同じ着想にヒケシグモ(群馬県碓氷郡)ミズグモ(茨城県土浦市)がある。

以上のように、童詞から生まれる俚語は、気まぐれな思いつき程度のものが多く、意味も、つかみにくいものが多い。したがって、語の寿命も短く、次々と変遷を重ねてゆくことになる。

「蜘蛛さん蜘蛛さん、根はなせ」(栃木県河内郡)という童詞がある。中に「蜘蛛さん蜘蛛さん目はなせ」という報告がいくつか混っている。今でこそ、そこの人はジグモ、ツチグモの語を使っているが数年後どのような語が生まれるか、むしろ楽しみでさえある。

(註一)「蝸牛考」《二種の蝸牛の唄》創元社版三三頁参照

(註二)北原白秋篇「日本伝承童謡集成」第二巻動物参照

E 民間信仰による例

この類に属する話は、農山村の、素朴な人々の信仰から生まれたと思われるものが多く、その解釈には殊に民俗学的な考察を必要とする。

(1)サンバイサン(徳島県小松島市)民俗学の説明によれば、これは「田の神様」ということになる。(註一)田のあぜに袋を下しているこの蜘蛛の姿は、おそらく信心深い農夫にとっては我が田におりた神様とみえたことであろう。民謡にも「けふの田の、サンバイサマを、降すには、どのくぼへ、三ますのくぼの真中へ」という例がある。(註二)

(2)オコシンサン(神奈川県津久井郡)これは「庚申様」と、とるよりも「荒神様」と、考えた方が、適切の様に思う。荒神の中には「地神」「地主神」としての性格をもったものもあるらしい。(註三)タアココ(茨城県土浦市)は、「田はここ、田はここ、おこしんさん」(註四)という神をよぶ詞から出たものではなかろうか。

(3)サイノムシ(鹿児島県姶良郡)「さえの神」のことかと考えられる。そうであれば、これは「道祖神」を指すものであり、地蜘蛛から連想することも無理ではない。

(4)カミナリグモ(新潟県中頸城郡)「田」と「雷」との関係が極めて密接なものであることは、柳田国男氏により既にくわしく説かれている。(註五)田にとって最も大切なものは水である。その水は雷が引くと信じられている。そこに農民の雷に対する信仰が生まれる。人々は地蜘蛛の袋を田に落ちた雷の仮屋とでも考えたのであろうか。オカンダチグモ(茨城県猿島郡)ゴロゴロムシ(岩手県宮古市)も「雷」を指したものと考える。テンジングモ(神奈川県高座郡)の「天神」も古来「雷神」と縁が深い。

(註一)民俗学研究所編「民俗学辞典」《さんばい》《田の神》参

照

（註二）柳田国男氏編「分類農村語彙」参照

（註三）註一と同書《荒神》参照

（註四）註二に同じ

（註五）同氏著「妹の力」《雷神信仰の変遷》参照

F　他の動物から類推した例

地にもぐっているという点でこの蜘蛛に似ていて、しかもよく人々にしられた動物にたとえることがある。

(1)アリグモ（群馬県・埼玉県）(2)モグラグモ（青森県・新潟県・埼玉県）(3)ツチネズミグモ（兵庫県神戸市）中でもアリやモグラは誰でもすぐに思い浮かべる動物である。(4)カッコ（新潟県三島郡）は普通は「蟻じごく」のことである。地蜘蛛と蟻じごくとは大変間違いやすく、前にも述べたように、調査の際にも十分に注意する必要があった。それでも地蜘蛛の俚語として、従来、蟻じごくに用いられていた俚語が報告されることがしばしばあり、果して調査の誤りなのか、又は、実際に混同が生じているのか判断に迷う場合も少くない。柳田氏も「蟻地獄と子供」の中で、この問題にぶつかっておられる。註二次に、地蜘蛛の俚語として報告されてはいるが、従来の蟻地獄の俚語と語形の同じ例を列挙してみる。コッポドン（熊本県玉名郡）イチコ（山梨県南都留郡）イボサン（香川県大川郡）ウンコロタンコロ（栃木県那須郡）コモコモ（岡山県苫田郡）ジロコタロコ（茨城県土浦市）ジモムシ（長野県諏訪郡）ツボツボ（青森県上北郡）テコハコ（群馬県利根郡）トッコトコ（栃木県足利郡）トトメ（神奈川県足柄上郡）ベゴロ（青森県西津軽郡）ママッコ（神奈川県横浜市）メメコ（兵庫県神戸市）モモンジョ（兵庫県養父郡）等。

また従来、蟻じごくの俚語として発表されているものの中で、（註二）地蜘蛛を指したかと思われる俚語をひろってみると、

ケンカグモ（広島県沼隈郡）ジンブク（兵庫県和歌山県）ツチクボ（兵庫県但馬）ツチグモ（福岡県三池郡）ハラキリ（茨城県稲敷郡）トノサマムシ（奈良県吉野郡）等がある。

地蜘蛛と蟻地獄とは、掘り出す時の童詞等は殆ど同じで、そのため童詞から派生した俚語の如きは、一致することも当然といえる。この両者が、果して関東西部における「とかげ」と「かまきり」の如き交替現象を示すかどうかは疑問であるが、とにかく両者が互に影響しあっていることは確かである。

（註一）同氏著「西はどっち」《蟻地獄と子供》三三五頁参照

（註二）佐藤清明氏著「方言資料」第二輯《蟻地獄全国方言集》及び柳田国男氏著「西はどっち」《蟻地獄と子供》

G　命名の原因が不明の例

最後に未だ命名の原因がつかめない例の中から主なものを挙げておく。

イタジキグモ（青森県三戸郡）オンタケ（鹿児島県姶良郡）カッポケサン（熊本県菊池郡）ガンジョオサン（三重県飯南郡）ジワタグモ（大分県東国東郡）ジンネンカン（愛知県豊川市）ズリバイ（福島県相馬郡）ゼンマイグモ（埼玉県秩父郡）ゾオリグモ（岡山県苫田郡）ダニャクボ（岩手県宮古市）デンメ（静岡県田方郡）テッポオムシ（鹿児島県姶良郡）チョオジャ（千葉県匝瑳郡）トオシログモ（福島県石城郡）トトサンメ（神奈川県足柄上郡）バクバクグモ（東京都立川市）ベンケエ（東京都南多摩郡）ベエボオ（群馬県太田市）ボシポシグモ（鹿児島県揖宿郡）マンマキッキ（石川県羽咋郡）ヨリグモ（鹿児島県揖宿郡）レンペエグモ（埼玉県北企郡）等。

この中には、強いて解釈しようとすれば出来ないこともない例もあるが、尚、資料の充実をまって後に問題としたい。

二　命名と分布

既に述べてきた如く、この蜘蛛の俚語量は相当に多い。そしてそれらの俚語は夫々に異なった広さの共通圏を持っている。私はここで、俚語における命名とその語の共通圏との関係について考えてみたい。

従来、俚語の分布というと、柳田氏の「方言周圏論」がすぐに考えられてきた。もっとも、最近はその批判も理論的には活潑になってきてはいるが、「蝸牛考」に匹敵するだけの資料が提出されていないように思われる。周圏論をめぐる議論のうち、殊に目立ったものに「言語生活」昭和二十九年（二月号）金田一春彦氏の「辺境地方の言葉は果して古いか」と、それに対して書かれた。同年（九月号）楳垣実氏の「方言孤立変遷論をめぐって」とがある。私は、これらの御説から多くのものを教えていただいたが、「方言の変遷には、周圏的なものと、孤立的なものとあり、両者をはっきり区別して考えねばならぬ」ということが殊に大切な結論のように思われた。

地蜘蛛の俚語で、比較的共通圏の広いと思われるものに、次の様な語がある。ジグモ、ツチグモ、アナグモ、フクログモ。これらはいずれも略々全国的な分布を示しており、各地において、この蜘蛛の他の俚語とも共存している。これらの語に共通なことは命名が極めて素直なことである。普通の地上の蜘蛛とくらべて、地の中の、土の中の、穴の中の、袋の中の、蜘蛛という表現は、至極素直にそのものを示しているといえる。私はこのように、命名が素直な場合には、各地方において、互に交渉がなくても、同じような俚語が、それぞれ自然に発生し、成長してゆくのではないかと考えている。極端な例ではあるが、外国語の場合を考えると、英語では a ground-spider（土ぐも）、独逸語では die Minierpinne で minieren は（穴をほる）であるから（穴ぐも）と直訳出来る。つまり我が国における、比較的共通圏の広いツチグモ、アナグモと一致するわけで、この例は、交渉の殆どない人々の間でも、この蜘蛛に対する命名が殆を一にしていたということが出来る。

つまり、ジグモ、ツチグモ等の語が全国的にみられるのは周圏的分布によるものでなくて、各地に自然発生的に生まれたものであると考えたい。しかもこれらの俚語は、表現が素直なために変化することも殆どなく、各地にそのまま行われているのである。

従来は、地理的に互に相当離れている、しかも極くわずかな例でも、両者が語形的に似ていると何かそこに周圏的作用が働いたように考えやすかった。しかし、各地の俚語の命名や変化の過程は意外に一致するのである。例えば「蝸牛」のデンデンムシ「地蜘蛛」のデンデンムシ「蟻地獄」のデンデンコボシ等、いずれも別々に「出え出え」という童詞から出来たと考えられる。又、既に述べた栃木県や茨城県のクログモと、岡山県や兵庫県のクログモは、同一の地から発生し、伝播したとみるよりも、それぞれの地で、語頭のフ音が脱落したと考える方が自然であろう。

また、地蜘蛛の俚語の変化は、東京の区内においては殆ど起きていない。むしろ変化は田舎において極めて活潑で、例えば、同じ東京でも三多摩地方では数十の俚語を数えることが出来る。東京都西多摩郡多摩村に、関戸部落のダイカングモを中心として、オダイカン、オデイカン、オデカン、オジャカン、アカジャン、タンカチと、周圏的に分布している例があるが、小範囲なため

か、外側にゆくほど変形した、いいかえると外側にゆくほど新しい形の俚語がみられるのである。

このことは、広い範囲における周圏論においても考えねばならないのではなかろうか。

以上、未熟ながら地蜘蛛における俚語の命名と分布について考えを述べた。大方の御叱正を仰ぐ次第である。

〔あとがき〕

一、本稿は去る昭和二十九年十月十日の国語学会研究発表会での発表を中心としてまとめたものである。その折、御教示を賜った、金田一春彦氏、林大氏、永野賢氏、都竹通年雄氏、松延市次氏に、また、数年来、終始御指導をいたゞいている山田忠雄先生にあつく御礼申し上げる。

二、また、俚語の採集に御協力いただいた、日大通信学部学生諸氏をはじめ、多数の方々にあつく御礼申しあげる。

——東京都立小金井高等学校教諭——